

展覧会情報

上村松篁展 Uemura Shoko 2014年5月27日(火) - 7月6日(日)



上村松篁《蓮》1952年 松伯美術館蔵

上村松篁は明治35(1902)年、日本画家・上村松園の長男として京都市内に生まれます。大正10(1921)年、京都市立絵画専門学校に入学すると共に西山翠嶂に師事、13年同校卒業後は研究科に進みました。同校在学中から第3回帝展で初入選、昭和3(1928)年の第9回展では特選となるなど、以後官展系展覧会を中心に活躍、翠嶂塾青甲社の塾展等へも出品を続けていました。ところが、第二次世界大戦後の昭和22年、戦前の官展の後継である第3回日展で審査員をつとめたところ、その旧態依然とした審査に失望し同展を脱退してしまいます。そして早くも翌年には、奥村厚一、秋野不矩、福田豊四郎、吉岡堅二、山本丘人らとともに創造美術協会(新制作協会日本画部を経て現在創画会)を結成、官展にも塾にも依らず、発表を続けました。《星五位》、《燦雨》など伝統的な円山四条派の写生を活かしながら、近代的な構成を持つ新しい花鳥画として蘇らせた作品を生み出す一方で、昭和11年から43年の定年退官まで母校の京都市立絵画専門学校(現・京都市立芸術大学)で後進の指導にあたります。その両方の功績により58年、文化功労者となり、翌59年、母子二代での受章となる文化勲章を受章。平成13(2001)年惜しまれつつその生涯を閉じました。今回の企画は、母・松園譲りの「品がある」作品を追求し続けた松篁芸術の軌跡を詳細に紹介する大規模な回顧展です。《樹下遊禽》、《孔雀》、《丹頂》等の代表作を含む初期から晩年に至るまでの本画約75点と素描、挿絵原画により、近現代の京都画壇において格調高い花鳥画を描き続けた上村松篁の足跡をたどります。

講演会

「自然との対話の中で」

上村淳之氏(文化功労者・日本芸術院会員・日本画家)
日時:2014年6月7日(土)午後2時~3時30分

「上村松篁画伯の人間像 - 12年に及ぶ撮影を通して」

飯島幸永氏(写真家)
日時:2014年6月21日(土)午後2時~3時30分
会場:京都国立近代美術館1階講堂
定員:100名
※聴講無料、当日午前11時から受付にて整理券配布

公式ウェブサイト <http://s-uemura.exhn.jp/>

友の会特別解説会

日時:2014年6月17日(火)午後5時~6時
集合場所:当館1階ロビー
集合時間:午後4時55分
募集人数:先着10名
解説者:小倉実子(当館主任研究員)

申し込み先:京都国立近代美術館 事業係
電話:075-761-4115

(月曜から金曜まで午前10時~午後5時)

※お申込の際は、お名前・会員番号をお伝えください。

平成26年度 第2回 コレクション展 5月14日(水) ~ 7月13日(日)

主なテーマ

特集展示:上村松篁ゆかりの作家たち
ゼロ年代のセルフ・ポートレート——高嶺格と澤田知子
松篁同時代の工芸家たち
河井寛次郎
戦後復興期の抽象
マルク・シャガールの絵画と版画
屋外彫刻

第2回コレクション展は、上村松篁展の開催にちなんで「上村松篁ゆかりの作家たち」を特集。日本画は上村松園や秋野不矩をはじめ、油彩画は須田国太郎や猪熊弦一郎を紹介。工芸コーナーでは「松篁同時代の工芸家たち」とし中井貞次の染織、六代 清水六兵衛の陶芸などを紹介しています。その他、マルク・シャガールの絵画(寄託作品)も含め、約95点の所蔵作品をご覧いただけます。



(左) ゼロ年代のセルフ・ポートレート——高嶺格と澤田知子、(右) 松篁同時代の工芸家たち



(左) 戦後復興期の抽象、(右) マルク・シャガールの絵画と版画

次回展覧会

うるしの近代——京都、「工芸」前夜から 2014年7月19日(土) —8月24日(日)

KYOTO: Re-creation of Reminiscence—— Lacquerware in Modern Japan



迎田秋悦《杉藤蒔絵硯箱》1920年

深い漆黒のつや、華やかな朱色、金や銀の輝き、虹色に光る貝——ウルシの木から採れる樹液を使って器の表面を塗り重ね、蒔絵などの装飾を施す漆芸には独特の美しさがあります。漆は私たちの生活に関わるあらゆるものに用いられ、はるか昔から日本人の暮らしを豊かに彩ってきました。この展覧会では、まとまった形で紹介されることの少なかった京都の動向にスポットをあてて、近代の漆芸を紹介します。明治時代、日本の近代化はさまざまな形で西洋の文明を取り入れることから始まりました。私たちが普段使っている「美術」や「工芸」という言葉も、この頃に西洋美術の翻訳語として生まれました。そして、京都の漆芸界は、このような東京中心の新しい美術のあり方に大きな影響を受けつつも、一方では洗練された遊びの世界から日常の器にいたるまで、「工芸」という言葉が生まれる以前のものづくりの伝統を脈々と受け継いできたのです。

本展は、塗師の木村表斎、蒔絵師の富田幸七、浅井忠と神坂雪佳という二人の図案家、そして彼らの指導を受け、それぞれが京都を代表する漆芸家となった迎田秋悦、戸郷光幸などの作品を、海外の美術館からの里帰り品も含めて一堂にご覧いただける、またとない機会となるでしょう。京都の漆がどのように近代を迎えたのかを考えることで、「工芸」への新たな視点を探ります。

講演会

「うるしの近代」

中尾優衣氏（当館研究員）

日時：2014年8月16日（土）午後2時～3時30分

「京都の近代工芸産業と神坂雪佳・浅井忠（仮題）」

佐藤敬二氏（京都精華大学教授）

日時：2014年8月23日（土）午後2時～3時30分

会場：京都国立近代美術館 1階講堂

定員：100名

※聴講無料、当日午前11時から受付にて整理券配布

関連イベント

京都・和菓子の会

「うるしへのオマージュ——京菓子が彩る漆の世界」

日時：2014年7月20日（日）・21日（月・祝）

主催：京都・和菓子の会

協力：京都国立近代美術館

お問い合わせ

「京都和菓子の会」事務局（担当：井上）

メール：webmaster@kyo-kaze.jp

ファックス：075-841-8089

- 京都漆器青年会の有志と当館研究員によるギャラリー・トークなど、漆に親しんでいただくための様々なイベントを開催します。詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。

テート・モダン美術館館長 クリス・デルコン 講演会

「21世紀のための美術+建築——テート・モダン」

4月4日（金）、英国テート・モダン美術館館長、クリス・デルコン氏の講演会に250人の参加者が集まりました。当講演は2015年に開催の京都国際現代芸術祭に先だって行われているプログラムの一環で、当館と京都服飾文化研究財団の三者共催で開催しました。これからの美術館が現代の社会においてどのように機能していくべきなのかについて、2016年にオープン予定のテート・モダン美術館の増築部の構想についてもふれながら語られました。



ピピロッチェ・リスト 講演会



4月29日（火）、京都国際現代芸術祭2015の出品作家として来場している、現代美術家のピピロッチェ・リスト氏によるレクチャーが当館ロビーで開催、約200名が参加しました。紙と鉛筆を使った簡単なワークショップから始まり、彼女の天真爛漫な性格のおかげで、講演は終始明るい雰囲気で行われました。同時期に当館コレクション展でも彼女の作品を展示していたので、別途企画された当館研究員による解説プログラムと両方楽しまれた参加者も多かったようです。



NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films 2014

白黒の美学——日本の撮影監督 特集

6月14日（土）

午後2時～3時30分

『驟雨』

1956年、監督：成瀬巳喜男

午後3時50分～5時30分

『十七才の抵抗』

1957年、監督：井上梅次

6月15日（日）

午後2時～3時49分

『嵐を呼ぶ十八人』

1963年、監督：吉田喜重

午後4時10分～5時43分

『黒の超特急』

1964年、監督：増村保造

1プログラム：500円（当日券のみ）

会場：当館一階講堂

チケットは会場入口にて販売、午後1時30分より販売開始

各回入替制・定員100名

企画協力：川村健一郎・富田美香

（共に立命館大学映像学部准教授）

京都国立近代美術館賛助会員・一般会員

当館は下記、賛助会員の皆様からご支援・ご支持をいただいております。

